

【ねがいはましては】

令和3年11月25日

KYOWA SCHOOL

第371号

「子どもたちにとっての『戦争』とは」

『彼らは現代の日本社会を一種の戦争状態と見なしているのではないかと私は憶測しています。人と人はなかなか信頼し合えない。競争があり、いじめがある。誰と誰がつながっているのか予想がつかない。』

これはある日の新聞記事の一部です。歴史家の成田龍一さんのものです。専門は日本の近現代史。本当の戦争を全く知らない世代がどのように戦争を捉えているのか、私もそのひとりなのですが……。『戦争』……人と人が殺し合う。国と国が戦う。爆弾が降りそそぎ、人々が逃げ惑う。私の場合は父が戦地へ赴くための兵舎の中で終戦を迎えたそうです。かろうじて父は戦争の片隅を経験した人のひとりなのかもしれません。実家は東京下町なので当然父は空襲を身近に経験しています。かろうじて聖路加国際病院（キリスト教系病院）が近くにあったことで米軍の爆撃から逃れることができたそうです。当時の爆撃投下は兵士自らが航空写真と目下の景色を照らし合わせながら目視で落としていたそうです。当時の東京の市民たちは低空で飛ぶ爆撃機を間近で見ながら恐怖の中に身を潜め、または逃げ惑っていたことと思います。

今の子どもたちにとっては、ひいおじいちゃんやひいおばあちゃんから、かろうじて聞くことのできる話かもしれません。生々しいお話を直接聞くことができるのも時間の問題になっていくのでしょうか。広島・長崎の被爆者の方々のお話も同様だと思います。

子どもたちにとっての戦争は、書物や映画、ドラマであったり、また演劇であったりが常道になっていくのかもしれませんが。ひょっとしたらゲーム？ 人と人が直接殺し合う姿より、人がコントロールする武器同士を戦わせる姿の方が主体になっているのかもしれませんが。つまり『命』をいまひとつ実感できない状態かもしれません。約80年前には、女性たちが竹やりを持って「エイッ、ヤアー」と、日々訓練していたなんて想像もつかないと思います。

ひょっとすると子どもたちの心に映る『戦争』とは、すっかりかたちを変えてしまっているのかもしれませんが。

だとしたら、戦争は今でも続いているのかもしれないと感じました。たしかに人の死という最大のテーマからは離れたものなのかもしれませんが、『戦う』ということにおいては共通したものを感ずります。『命』という普遍的なものに対する認識の在り方が大きく姿を変えたとしても、その時の受け取り方で感情は共通したものになるのかもしれませんが。唯一共通したものといえば、100%信頼する事のできない相手を目の前にし、心と心を向かい合わせ、にらみ合う状態です。

成田さんの言われる『競争がありいじめがある』この一節だけで十分に学校を連想することができます。そこには戦いのみがあり、信頼など微塵も感じられません。競争は戦いであり、いじめはお互いが信頼を持たない状態です。

まさにたった今、子どもたちは戦争状態の中に生きていけるのです。部活動の中でも、同じチームの仲間たちは、同期の桜です。そして試合ともなれば相手は敵です。勝つか負けるか、相手がミスをしようものなら全員でそのミスを喜び、味方がミスをする「ドンマイドンマイ」と言って励ます……。

定期テストで順位が出ます。順位が上がれば……。下がれば……。他人を、隣人を敬う気持などありません。そこへ輪をかけるように家族からの叱咤……。「そうか、やはり他人に勝つことは家族にとっては良いことなのだ。」

「戦争に勝つことは、家族にとって良いことなのだ……。」そう思い込んでいるお子さんは多いかもしれません。

私は人と人の間に最も必要なものをひとつ掲げなさいと言われてたら、間違いなく『信頼』と掲げます。

信頼があれば人と人は争うことはしなくて済むはずですが。自らの希望や要望も話し合うことで解決へと導かれると思います。信頼があれば、安心が生まれ、幸福感も育っていきます。家族が一家団欒の時を過ごしている状態です。他愛のない会話に花が咲き、子どもたちの笑い声に部屋の灯りもさらに色合いを重ねていきます。信頼の花が満開に咲き乱れます。その中に学校の成績の話（特に下がった系）がひとつでも現れたとします。一瞬にして空気は防空壕の中のようにになってしまうのでしょうか。

子どもたちは、日々戦争最前線の中を生きています。戦いに疲れて家へ帰ってきます。もう戦争のことなど思い出したくないのです。感じたくないのです。必要なのは家族のぬくもりです。

子どもたちは、今、戦争の真っ只中に生きています。救えるのは家族です。その家族が救いの手をさしのべなければ、どこが安らぎを感じる場なのでしょうか。私はここが、この小さな教室が安らぎを覚える場所としてありたいのです。

すでに戦争で傷つき、重い後遺症を負ってしまった子たちが多くいます。ここで向かうことが学校からの宿題であったりすると、戦争を連れてきていることになってしまいますので、ここは安らぎの場所ではなくなります。「やっぱりつまらないな。」

本来、ここでは学校を感じさせない内容のものに取り組みたいのですが……。でもここで宿題をしなければ、明日提出だから……。宿題だって楽しさを感じられたらいいよね。寄り添ってあげるからね。

この小さな教室は、みんなが戦争を忘れていられるところなのです。そのようになりたいのです。